

一八八七年三月二十五日(金)

バラナゴル僧院^{マト}

聖ラーマクリシュナの最初の僧院^{マト}——ナレンドラたち信者の放棄と修行

タクール、聖ラーマクリシュナがいらつしやらなくなつてから、ナレンドラたち若い信者一同は一ヶ所に集まつて暮らしていた。スレンドラの好意で彼らのために、バラナゴルに一軒の家を借りることが出来たのである。その家が、今では僧院^{マト}になつたのだ。礼拝室で皆は、師、聖ラーマクリシュナに日夜お仕えしている。ナレンドラや信者たちはこう言っている——もう二度と世間には戻らない。タクールが、女と金を捨てろ、とおっしゃつたのだから——どうして家に戻れようか！ シャシーが全責任を負つて師のお守り^もをしている。ナレンドラが同胞たちの中心になつて、彼らの面倒を見ていた。兄弟たちも喜んで彼に指導してもらつてゐる。ナレンドラは、修行をしなければ至聖をつかむことはできない、と言つて、自分が先に立つて兄弟たちに様々な修行をさせ始めた。ヴェータ、ブラーナ、およびタントラの教義に従つて——まるで、師を見送つた悲しみを追ひ払うためのように、いろんな種類の修行を次々と開始していく。時には誰もいない静かな木蔭で、時にはたった一人で火葬場

のど真ん中で、また時にはガンガールの岸辺で修行している。僧院^{マト}の中では瞑想室にこもって一人で称名したり、瞑想したりして日を送っていた。また時には兄弟たち全員を集めて、いっしょに喜々としてサンキールタンを歌い、踊る。全員が、また殊^{こと}にナレンドラが、神をつかむために熱中になっている。そして時々こう言うのだ——「見神するまで断食する願掛けをしたほうがいいのだろうか？ ああ、どうやったたら、あの御方をつかまえられるんだらう？」

タクルの没後、ラトウ、ターラク、年長のゴパール、この三人はコシポールの家を出たら行く先がなかったたので、彼らの名前でスレンドラが現在の僧院^{マト}を用意してくれたのだった。スレンドラは言った——「兄弟^{みんな}！ 君たちは此処でタクルのお守り^もしてお住みなさい。私たちも、時々安らぎに来るから……」出家する決心をした若い信者たちはこれを見て、洪々戻った家から頻繁にこの家に入りししていたが、やがて、もう家には帰らなくなってしまった。ナレンドラ、ラカール、ニランジャン、

(訳註1) 一八八六年九月の初め頃、ある日の夕方、スレンドラが自宅の礼拝室で瞑想していると、聖ラーマクリシュナが現れて言った——『お前、ここで何やってる。私の子どもたちが、行き場がなくて途方に暮れているんだ。他のことはさておき、お前、彼らの世話をしてくれないか』スレンドラは急いでナレンドラの家に行つて、そこにいた弟子たちに——『兄弟^{みんな}！ 君たちはどこに行くと言うのか——家を一軒借りようではないか。君たちは此処でタクルのお守り^もしてお住みなさい。(在家の) 私たちも、時々安らぎに来るから……。毎日を、妻や子どものためだけに過ごせと言うのか——。私はコシポールで、師のためにずい分とお金を用立てました。今度は、みんなのためにも用立てましょう！』と言った。

バブラーム、シャラト、シャシー、カーリーたちである。そして間もなく、スボドゥとブラサンナが加わった。ヨーギンとラトウはプリンターヴァンに行っていたが、一年後に戻って仲間に加わった。ガンガーダルは始終、この僧院マトに来る。彼はナレンドラの姿を見なければ我慢ができないのである。彼は、マトジャヤ、シヴァ、オームカーラ(シヴァ神に栄光あれ)、マトというアールティ献灯前の讃詞を皆にすすめた。また、僧院マトの兄弟たちは、マトグルジーキフォテ(お師匠さまに栄光あれ)、という賀詞を折にふれて口に出していたが、これもガンガーダルが教えてくれたのである。チベットから戻った後に、彼は僧院マトに参加した。タクールのあと二人の信者であるハリとトゥルシーは、ナレンドラと僧院マトの兄弟たちに会うため、いつも僧院マトに通ってきていた。やがて又、彼らも僧院マトに住みつくようになった。

〔ナレンドラの思い出話——聖ラーマクリシュナの愛〕

今日は金曜日。一八八七年三月二十五日。校長はマトの兄弟たちに会いに来ていた。デベンドラも同行した。校長は頻繁にマトを訪れており、時には泊まっていく。先週の土曜にも来て、土、日、月と三日滞在したのである。マトの兄弟たち——殊ことにナレンドラは特別に強い離欲の決意をしている。それで校長は、熱心に彼らの様子を見に来るのだ。

夜になった。今夜も校長はここに泊まるつもりである。

日が暮れかけた時、シャシーがやさしい声で神の名を唱えながら礼拝室に灯あかりをつけ、香を焚いた。香を各室に祀つてある神像や絵像の前で焚いて、ていねいに礼拝した。

こんどは献灯^{アトラテイ}である。シャシーが献灯^{アトラテイ}をする。マトの兄弟たち、校長、デベンドラ、皆一同、合掌して献灯^{アトラテイ}を拝見しながら、声を合わせて献灯^{アトラテイ}の讃詞を奉る。——「ジャヤ、シヴァ、オームカーラ。ブラフマー、ヴィシユス、サダーシヴァ^(訳註2)！ ハラ、ハラ、ハラ、マハーデーヴァ^(訳註4)！」

ナレンドラと校長の二人が話をしている。ナレンドラは、タクルルのところに来るようになって以来の、さまざまな思ひ出話を校長にして聞かせた。ナレンドラの年齢は今、二十四才と二ヶ月である。

ナレンドラ「まだほんの初めの頃、タクルルは恍惚とした様子でこうおっしゃいました——『お前、来たね！』と。

そのときぼくは思いました——『不思議だなあ！ この方は、ずっと以前からぼくを知っていらいらっしゃるようだ』

それから、『お前、何か光^クが見えるかい？』とおっしゃる。

私は、『はい、眠りに入る前に、額のところで何か光のようなものがぐるぐる廻っているのです』と答えました」

校長「今でも、見えるのですか？」

(訳註2) サダーシヴァ——「永遠に吉祥なる者」の意でシヴァ神の別名。

(訳註3) ハラ——「破壊者」の意でシヴァ神の別名。

(訳註4) マハーデーヴァ——「偉大な神」の意でシヴァ神の別名。

ナレンドラ「以前にはよく見たのですが——。ジャドウ・マリックの別荘で、ある時タクールはほくにさわって、何かブツブツおっしゃった。ぼくはとたんに気を失ってしまいましたね！ そのときのシヨックは、一ヶ月も消えませんでしたよ！

ぼくが結婚するかもしれない、という話を聞かれたときは、マー・カーリーの足をつかまえて泣いていらっしやいました。泣きながらマーにこう言って——『マー、みんなひっくり返しておくれ。ナレンドラが沈まないように！』

父が亡くなって、母や弟たちが食べるのにも困っていた頃、ある日、アンナダ・グハといっしょに行つて、あの方にお会いしました。

あの方はアンナダ・グハに向かつて、『ナレンドラのお父さんが死んで家族はとても困っているから、友だちが皆で助けてやれば、とてもいいんだがね……』とおっしゃった。

アンナダがいなくなつてから、ぼくはあの方にこつぴどく叱言こじごをいいました——『何だつてあなたは彼に、あんなことをおっしゃったのですか？』つて。

あの方は、ぼくに叱られて泣き出した。泣き泣きこうおっしゃるのです。『ああ、お前のためなら、一軒、一軒、乞食こじきすることさえできるよ』

あの方は愛で、ぼくたちを皆支配してしまつたんですね。あなたはどうお思いになりますか？」
校長「まったくその通りです。無私、無辺際の愛でしたね」

ナレンドラ「ぼくに、たった一人でいたときに、あの方は或ることをおっしゃったのですが……。

この話は、他の誰にも話さないで下さいね」

校長「話しませんよ——で、どんなお話だったのですか？」

ナレンドラ「『わたし自身は、神通力をつかうことはできない。お前を通してなら使えるが、どうだい？』と、おっしゃるのです。ほくは、『いいえ、いけません』と答えました。

ほくはいつも、タクルのお言葉を笑い飛ばしていました。そのことは、タクルからお聞きです。神の姿を見た、ということもほくは、『そんなのは、あなたの錯覚ですよ。見たような気がしただけです』なんて言つて——。

あの方はおっしゃいました——『でもさ、わたしはよく客室^{クヂイ}の屋根に上がって叫んだものだよ。クオーイ、信者たち、何処^{どこ}にいる、早く来ーい。お前たちの顔を見ないと、わたしは死んでしまうよ——』。マールが言ったんだもの、信者たちが集まってくるよって。——ごらん、その通りになつたじゃないか』

そう言われると、ほくも返す言葉がなくて黙っていました……」

〔ナレンドラは無形の神に属する——ナレンドラの我〕

「ある日、部屋の戸をびつたり閉めて、デベンドラさんとギリシュさんにほくのことをこうおっしゃいました——『この子に、自分が何者なのかを明かしてしまつたら、もう肉体を持ちつづけることは止めるだろうよ』と」

校長「ええ、その話は聞きました。私どもにも、その話は何べんもおしゃいましたよ。コシポールの家にいるとき一度、君はあの境地(ニ分イカルバサマ)(無分別三昧)に入ったでしょう？」

ナレンドラ「あの境地で、ぼくの体は無いのだ」と悟りました。ただ顔だけ見えたのです。タクルは階上うへの部屋におられて——ぼくは、その下の部屋でそうなつたんですよ！ ぼくは泣き出して——ぼくはどうなつたんだ！ って言いながら……。ゴパール兄さんが階上にかけて上がつてタクルに、『ナレンドラが泣いています』 って報らせました。(訳註、ゴパール兄さん——ゴパール・チャンドラ・ゴシユ、後のスワミ・アドヴァイターナンダ。この時49才で年長のゴパールとも呼ばれていた)

あの方にお目にかかると、『これでよくわかつたろう。カギはわたしのところに置いとくよ！』とおっしゃった。ぼくは、『ぼくはどうなつてしまつたんですか？』 って言いました。

あの方は、他の信者たちの方を向いてこうおっしゃいました。『これは、自分の正体を知つたら肉体を捨ててしまふだろう。わたしが忘れさせたままにしておいた』と。

ある日のこと、『お前、もし望めば、胸の中にクリシユナを見ることができると、おっしゃいました。ぼくは、『クリシユナなんて信じませんよ』と申し上げて……。二人で笑う)

それから、一つのことには気がきました——ある場所や物、それから人を見ると、以前に、前の生涯でも見たことがあるように感じられるのです。何だかとても親しく、懐かしくね！ アムハールスト通りのシャラトの家に行つたら、すぐさまぼくはこう言つた——『この家、ぼくはすっかり知つているよ！ 廊下も、部屋々々も、昔からよく知つてる』

「ぼくは自分の心に任せていたようにしてきた。でも、タクールは何も文句をおっしゃらなかった。ぼくがサーラーダン・ブラフマ協会のメンバーになったこと、ご存知でしょうか？」

校長「ええ、知っていますよ」

ナレンドラ「あの方は、あそこに女の人たちが出入りするのをご存知でした。女の人がいるところで瞑想はできませんから、その点で、あの協会のことをタクールは非難しておられました。けれど、ぼくには一言も、何もおっしゃらないのですよ！ ある日、ただこれだけおっしゃった——『ラカールには、お前があの協会に入っていることを言うなよ。言えは、あれも行ったがるかも知れないから——』って」

校長「君の場合は、心の力が非常に強い。だから、タクールは自由にさせておられたのです」

ナレンドラ「さんざ苦しみ悩んだあげくの果てに、現在の心境に達したのですよ。マスタル・マハトシャイ校長先生、あ

なたは苦しみ悩みを経験していらっしやらないから——ぼくが思うのに、人間は苦悩を通りこさなければ捨離 (Resignation) できません——神への全託 (Absolute Dependence on God)

アッチャー、そう……(訳註5)……こんなに^{エゴ}我がなく、穏やかで、謙虚で……。ぼくはどうすれば謙虚になれ

(訳註5)『コタムリト』のベンガル語原典には、…… や* * *と印字されている箇所が何カ所がある。これらは、一般の人には公言してはならないとタクールから言われたか、もしくはマヘンドラ・グプタがそう判断した秘密の内容であるとか、またはマヘンドラ・グプタへの個人的な教えや読者に語るべきではない内容のようである。

るでしょうか、教えて下さいませんか？」

校長「タクトルがおっしゃったでしょう。君の^が我^がについて——誰の^が我^がだ？」と

ナレンドラ「どういう意味ですか？」

校長「つまり……。ラーダーに向かつてあるとき一人の友だちが、『あんたが我を張ることは、クリシユナをけなすことになるのよ』と言った。すると、もう一人の友だちがこう応酬しました。『ええ、そりゃラーダーは我を張ったことはたしかよ。でも、この^が我^がは？　つまり、クリシユナは私の夫^が、そついう^が我^が——。クリシユナこそが、この^が我^がをラーダーのなかに置いたのです』と。タクトルのお言葉の意味はね、神こそが、この^が我^がを君の中に置かれたのだ。たくさんの仕事をさせるためにね！」

ナレンドラ「そして、ほくは公言しますよ。ほくにはもう、悲しみも苦しみも無い！」と

校長「ハハハ……。どうぞ、お希^{のぞ}みなら、大いに声高らかに公言なさい！」(二人で大笑い)

こんどは、ほかの信者たちのことが話題になった。ヴィジヤイ・ゴースワミー、その他——。

ナレンドラ「あの方はヴィジヤイのことを、『扉を叩いている』とおっしゃいましたよ」

校長「つまり、部屋の中にまだ入ることができないでいる、ということですか。でも、シャームプクルの家で、ヴィジヤイ・ゴースワミーはタクトルにこう申し上げましたよ。『私はダツカで、あなた様を、このお姿でお会いました。このお体そのままで——』と。君もそこにいた筈ですね」

ナレンドラ「デベンドラさん、ラームさん、この人たちは世間を捨ててでしょう——そうなるよう

非常に努力していますから。ラームさんは、こっそりと (privately) こう言いましたよ——二年後に世間を捨てる^グと」

校長「二年後に？ 子供たちの生活に心配がないようにしてから、というわけですか？」

ナレンドラ「それに、現在の家を貸して、もっと小さな家を買うつもりらしいですよ。娘の結婚や何かのことは親戚の人たちが世話してくれるでしょう」

校長「(ニティヤ)ゴパールはとてもいい境地になっているようですね、ちがいますか？」

ナレンドラ「どんな境地だとおっしゃるんですか！」

校長「とても気分が高揚していて、ハリ称名をすると涙をポロポロこぼして！ 毛も逆立って！」

ナレンドラ「興奮しさえすればエライ人になるんですか！ カーリー、シャラト、シャシー、サーラダたちの方が(ニティヤ)ゴパールより、よっぽどエライですよ！ 彼らの離欲、立派ですよ！ (ニティヤ)ゴパールはタクルールのことを信じているんでしょうかねえ？」

校長「たしかに、タクルールはこうおっしゃいました。彼はこの人間ではない(親しい信者の仲間ではない)と。でも、タクルールを深く信じて尊敬している様子を、私は見ましたがねえ」

ナレンドラ「どんなことをご覧になったのですか？」

校長「私が南神村^{トクネンシヨル}のお寺に行き始めた頃のことですが、ひとしきりお話が終わって信者たちがお部屋の外に出ました。そこで私が見たのですが——(ニティヤ)ゴパールが庭の路^{みち}にひざまずいて合掌していました——タクルールがそこに立っておられて……。とても月の明るい夜でしたよ。タクルールの

お部屋の真北にあるベランダの、すぐ向こうのレンガ粉を敷いた赤い道でした。そこにはほかに誰もいなかった。(ニティヤ)ゴパールが全霊を挙げて頼っていて、タクールは彼を励ましていらつしゃるように見えましたかね」

ナレンドラ「ぼくは、そんな情景を見たことはありません」

校長「それに、タクールは時どきおっしゃっていた——あれは覚者の境涯だ」と。でも、こういうこともよく憶えています。タクールが彼に、女の信者たちのところへ出入りするのを注意しておられたのを——。何度も何度も警告していらつしゃいましたよ」

ナレンドラ「タクールはぼくにはこうおっしゃった。『彼が覚者の境地なら、金のことなんか問題にしないはずなんだがなあ!』って。それから、こうもおっしゃったつけ——『彼はこの人ではないよ。わたしの身内の人なら、始終ここへ出入りするはずだ』って。

タクールは××氏ペーブにおこっていましたよ。いつも(ニティヤ)ゴパールといつしよにいて、タクルのところへあまり来なかつたんですよ。

とにかく、ぼくにはこう言っておられました。『ゴパールはシツダだが——ホタット・シツダだよ。あれはここの人じゃない。もしわたしの身内なら、あれに会いたくてわたしが泣かない筈がないだらう?』と。(訳註、シツダ——成就者、悟りを得た人。ホタット——突然、ひよっこり)

彼のことをニティヤーナンドラの生まれ変わりだと公言している人たちもいます。しかし、タクールは何度おっしゃったことか——わたしこそがアドヴァイター——チャイタニヤ——ニティヤーナ

ダの三人^(訳註6)がいつしよになったものだ」と]

(訳註6) アドヴァイタはチャイタニヤよりだいぶ年上で後に彼の弟子になった人物。ニティヤーナンダはニタイとも呼ばれ、一説ではチャイタニヤの兄とも言われる人物。チャイタニヤを含めた三人をチャイタニヤ派では尊師(ブラブ)と呼んでいる。